
JETBLACK-J.T.E-

閑夏明野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J E T B L A C K ― J . T . E ―

【Nコード】

N 9 7 7 9 Z

【作者名】

閑夏明野

【あらすじ】

正義とはなんぞや

それぞれの正義観を描いていきます

はじめに 的な

正義とはなんだろうか。

この問いは、ヒーローにとって永遠の命題と言っても過言ではない。特に正義のヒーローにとっては。

一口に正義と言っても色々ある。ありすぎるから例は挙げない。

ただ言える事が一つ、まあなんでもそうなんだが、唯一無二の正義なんて存在しない。答えは一つじゃないんだ。これは数学じゃないしな。決定的な答えは見つけにくいだろう。

二人いれば二通り正義観が。十人いれば十通りの正義観。千人いれば、四字熟語にもあるように千差万別に存在する。

この話はそれぞれの正義観について描かれていく。筈。

どう感じるかは、これまた千差万別。

感じ方も様々。こんなのは正義ではなく悪だ、と捉える人もいるだろう。

それが当たり前なんだから。

正義。あるとするならそれは非殺人。

21XX年10月28日。

「判決を言い渡す。被告、齋藤隆雄を懲役40年とす。これにて閉廷。」

少年は不服だった。

別に被告人と知り合いという訳ではないし、被害者という訳でもない。被害者と知り合いという訳でもない。

では何故不服なのか。

理由は簡単だ。

死刑にならなかったから。

少年は、誰に腹を立てていいか分からなかった。

最終告知をした裁判長か、それとも力不足の検察官か、若しくは人殺しを擁護した弁護士なのか。

少年は理解出来なかった。

他人の人権を蹂躪し、命を消した奴を何故死刑にしないのか。殺したのだから、殺されても文句は言えない筈だ。

少年は将来、司法の世界に携わりたいと思っていた。

ドラマや映画、ゲームなんかでは、証拠不十分でその罪から逃れようとする犯人を、時に危険に巻き込まれながら、時に知的な推理を展開しながら、最終的に裁いている。

司法は、少年にとって紛れも無い“正義”だったのだ。少なくとも虚構の世界では。

だが現実はそんなに華々しくない。

人を殺した奴が平然と生き延び、監獄に囚われはするものの、大して苦労もなく飯を食う。表面的に自己更正を果たした犯罪者が、檻から放たれ再び咎を犯す。

そんな世を見たせいで、いつの間にか司法は、少年にとって“正義”ではなくなった。

少年にとって“正義”があるとすればそれは、殺人を犯した者が、死刑を宣告された時だけなのだ。

だからやはり、少年は不服だった。

「どうしたのかね。足でも痺れたかな？」

はっとした。

周りを見ると、自分と、話し掛けてきた男しかいなかった。

「あ、いえ大丈夫です。」

「そうかい？なら良いんだ。・・・いや、良くはなさそうだな。」

「え？」

この人は誰だ？

確か自分は、一番最後に傍聴席に掛けた筈。

その時にこんな人は見かけなかった気がする。

「いやなに、君の顔が不満一色だったのな。判決が気に食わなかったのか？」

「・・・はい。」

何となく少年は話した。自分が今考えていたことを。

「・・・成る程。確かに死刑は正義の一つかもしれない。そもがそも、法とは、無力な市民を護るために作用しなければならないモノだ。とするならば、法とはイコールで正義だと言っても間違いではないだろう。つまり、法の一部である死刑も又、正義と言えるんだろう。」

「じゃあやつぱり、さっきの裁判長や検察官は正義なんかじゃないよ。」

「ふむ。君は、勧善懲悪の世界が好きなのか？」

「そりゃそうだよ。良い行いが悪い行いに上書きされるなんておかしいでしょ？」

「確かに。それは当然だし、一点を除けば私は君に全面的に同意だ。」

「一点？」

「死刑が正義、という考えのことだ。」

「・・・なんで。」

「完全に独断だが、私の考える正義とは非殺人だからだ。」

非殺人？この男は何を言っているんだろう。

殺人者が正義ではない、この男はそう言っている訳ではないのだ。

この男は死刑も殺人だと考えている。

「人を殺すという行為自体が殺人だ。とするならば、法に依るとは言え、死刑は人を殺す。言い方を変えれば死刑は武器だ。そしてそこに追い込んだ裁判官、検察官、弁護士、死刑執行人達は、全て殺人者なのだ。極論ではあるがな。」

「・・・でもそれは、正当な理由があつての死刑だから・・・。」

「まあ最後まで聞きなさい。確かに殺人者と言えるが、彼らは規則、つまりルールに則った上での殺人者なのだ。そもそも人殺しがいけないことだと定めたのは人間で、それを裁く為にルールを作ったのも人間だ。そしてルールを破った者を、殺すことは仕方ないと決めたのも人なんだ。」

「うん・・・？」

「私が言いたいのは、ルールに則ることが必ずしも正義ではないということだ。正しくあっても、それが正義だという意味にはならないのだ。詰まるところ、死刑確定に関わった者にやはり正義なんていないんだ。」

「・・・ということはやっぱり、司法に正義なんてないんだね。」
そこで男はにこりと笑った。

「正義の味方なんてこの世にはいない。本物であるなら、殺すこともせず、憎むこともせず、ただただ全てを慈しむ者がそれなんだ。そんなものは聖人君子でなければ有り得ないだろう？ということはどういうことか分かるか？有り得ないってことだ。」

「・・・そう。」

ん？正義の味方？

それは少年の求める者ではない。

正義の味方なんて、泥臭い者に彼はなりたくなんてなかった。

ただ彼は“正義”が我にあればそれだけで満足なのだ。
それなのに、微かに残っていた司法の正義は、目の前の男に完全に潰されたのだ。

「それは違うぞ少年。」

顔を上げると、まだ男は顔に笑みを浮かべていた。

「正義は確かに非殺人からくると私は信じている。しかし死刑はなくてはならない。私はね、司法は自らの正義を、非殺人からくる正義を捨てて、他人の欲望を満たしているんだと考える。」

「他人？」

「そうさ。言い換えれば被害者家族と言った所だな。死刑を望むのは基本彼らなのだから。」

「・・・それで？」

「ふむ。くどくど言ってきたが、今までの会話は全て忘れていい。」
「なんだと？」

この男は一体何を言っているんだ？

「望まれ、権利があったから行使した彼らは大概的に正義と言える。それを行使した彼らが正義と自覚しなければな。つまり、正義とはそれを意識しない者にのみある。これが私の結論だ。非殺人と無意識。これを、そうだな、君は特別にどちらかを成せばそれで正義としよう。」

「あ、ありがとう？」

あれ？目の前から男が消えた？

「だが、両立出来る者も見てみたい気はする。」

だのに声だけは聞こえる。

「・・・しかしそんな者はこの世ではやはり、有り得ないかもしれないな。」

「うわっ!？」

閉じていたドアが開き、外へ風が吸い込まれていく。

「さらばだ少年。あーだこーだ言ったが忘れてくれて全く構わん。
君の信ずる道、君の信ずる正義を邁進してくれ。私が見つけられない

かった正義を開拓する者がいるとすれば、それは君達なのだからな。」

ボタンと音を発て扉が閉まり、声も風も無くなった。

「・・・あの人色々言ってたけど。」

「・・・なんか、分かりづらかった、かな？」

「ま、いいか。」

少年の心には意味のない爽快感が溢れ、裁判で感じた不快感など、何処か銀河の彼方に飛んでしまったかのようだ。一見意味のない言葉も、並べ立てれば食事の必要性並に意味を持つて誰かも言ってたしな。

「自分の道を邁進する。よし、今日からこれ座右の銘にしよ。」

少年は扉を開き、そのまま帰路についた。

彼はやはり司法の道に進むだろう。

何故なら彼は、自らの信ずる道を邁進していくのだから。

「非殺人？無意識？何言ってるのかしらーあの裁断介添人とかいう奴は。遠回しに自分は正義じゃないって言ってるようなもんよねー。はい、巻き戻し。」

正義。あるとするならそれは非殺人。（後書き）

取りあえずD・GO／こと裁断介添人の正義について書いてみました。

いやーくどい文ですな。

読みにくい、同じ様な事ばっか言ってる。くどくどとまるで説教ですわ。

ま、彼は誰かに説くのは苦手ってことで。

今回の正義の基本は“非殺人”でした。

“非殺生”でないところは置いておきましょう。

次は別の正義を、もっとシンプルに書いてみたいと思います。
ではアディオス。

正義？なにそれ（笑）。敢えて挙げるなら無視

21XX年10月28日。

「判決を言い渡す。被告、齋藤隆雄を懲役40年とす。これにて閉廷。」

少年は不服だった。

別に被告人と知り合いという訳ではないし、被害者という訳でもない。被害者と知り合いという訳でもない。

では何故不服なのか。

理由は簡単だ。

死刑にならなかったから。

少年は、誰に腹を立てていいか分からなかった。

最終告知をした裁判長か、それとも力不足の検察官か、若しくは人殺しを擁護した弁護士なのか。

少年は理解出来なかった。

他人の人権を蹂躪し、命を消した奴を何故死刑にしないのか。殺したのだから、殺されても文句は言えない筈だ。

少年は将来、司法の世界に携わりたいと思っていた。

ドラマや映画、ゲームなんかでは、証拠不十分でその罪から逃れようとする犯人を、時に危険に巻き込まれながら、時に知的な推理を展開しながら、最終的に裁いている。

司法は、少年にとって紛れも無い“正義”だったのだ。少なくとも虚構の世界では。

だが現実はあるに華々しくない。

人を殺した奴が平然と生き延び、監獄に囚われはするものの、大して苦労もなく飯を食う。表面的に自己更正を果たした犯罪者が、檻から放たれ再び咎を犯す。

そんな世を見たせいで、いつの間にか司法は、少年にとって“正義”ではなくなった。

少年にとって“正義”があるとすればそれは、殺人を犯した者が、死刑を宣告された時だけなのだ。
だからやはり、少年は不服だった。

しかし、彼が不服に思おうが判決が覆ることなどない。そんな権利、彼には無いのだ。

物凄くもやもやした、嫌な気持ちを抱えながら彼は帰路に――

「判決を言い渡す。被告、本多忠信を懲役10年とす。これにて閉廷。」

不幸ってのは、いつ何処で牙を剥くか分かったもんじゃないよねー。
あの場に裁断介添人なんておらず、話をしなかったことで少年は車に轢かれて死亡した。

確か彼は司法の道を邁進するとか言ってたかしら？

そしたら悪人を裁くのよねー。

つまり彼は悪人が嫌い。

うふふ、良かったねー君が轢かれたおかげで悪人が増えたよー。

君は悪人が裁かれるのに、間接じゃなく直接的に関与したんだよー？
凄いいじゃん！

ホントはー、車をぶっ壊して助けられたんだけどねー。早く関わりたいかなと思ったんだー。

「ここまで言えば分かるよねー。」

裁判が終わり、全ての人が消えた静かな部屋に女の子の声が響く。
当然少年はそこにおらず、彼女の話に耳を傾けるのは彼女自身しかない。

「正義、この世でいっちゃ下らない言葉ねー。それを盾にすれば大概どーかなっちゃう訳だし。そんなことで、私にとって正義があるとするればそれは“無視”。悪も正義も無視すればきつとWinWinよー。正義の仕事を取らなきゃ彼らも喜ぶだろしねー。ってこ

とでシュー。」

女の姿が消え、扉も開かず、沈黙だけが出現した。

「・・・はー。とことんふざけてちゃらんぼらんだとは思っていたがここまでの奴だったとは。・・・仲間になるべきじゃなかったかも。取りあえず一言。無視することは正義なんかじゃない。ただの逃げだよ妙。」

正義？なにそれ（笑）。敢えて挙げるなら無視（後書き）

はい。シンプルに纏めました。

唐突過ぎて意味分らない？私にも分かりません。

誰かが言った、言葉の真の意味を知るのは読者だけである。

意味なんてのは後付けで、筆者は意味を知ることはないのかもしれない。

いやそりゃ自分だけですかねスミマセン。

次回はもうちょいしっかり書きますのでよろしく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779z/>

JETBLACK-J.T.E-

2012年1月7日01時52分発行